

## 犬死を結果した技術とシステム

### 南太平洋の激戦

緒戦で日本軍に敗れたフィリピンのアメリカ軍は、オーストラリアに撤退した。マッカーサー司令官は、I S h a l l R e t e r n（わたしは帰ってくる）の語を残して去っていった。

日本軍はアメリカ本土とオーストラリアの連絡を絶つため、パプア・ニューギニアからソロモン海域に進出した。フィジーとサモアの線で遮断しようとする戦略のため、FS作戦という。

一九四二年にはこの海域で日米両軍が激突し、死闘を繰り返した。ソロモン沖海戦、珊瑚海海戦などである。

ところが一九四二年四月十八日、日本近海に近づいた米空母ホーネットとエンタープライズから、艦載機ではない大型陸軍爆撃機B25十六機が発艦し、東京・名古屋・神戸を空襲して中国大陸に去った。

ドウリットル中佐率いる爆撃隊である。死傷者三〇〇人以上出したこの空襲は、軍部にも国民にも大きな衝撃だった。

なにしろ東南アジアを次々に占領し、国中が勝利に沸き立っていたからである。

事実南太平洋では日本軍は優位に戦闘を進めていた。その隙を衝かれた東京初空襲は、海軍の連合艦隊首脳部に屈辱感を与えた。

これは日本海軍が北太平洋の制海権・制空権を掌握していないことを示すものであり、海軍は一気にアメリカ太平洋艦隊の本拠であるハワイ西方のミッドウェイ島を叩こうと、大作戦を敢行した。

## ミッドウェイの大敗

ミッドウェイ海戦を描いた沢地久枝の『滄海よ眠れ』全六巻（『サンデー毎日』に一九八二年～一九八四年連載、文芸春秋、文春文庫三冊）が出色である。沢地はコンピュータを駆使して、日本側戦死者三〇五七名、アメリカ側三六二名の氏名を確認し、その遺家族の取材のために四〇〇〇万円の調査費を投じている。

年間四〇万の研究費、四万円内外の旅費しか支給されない国立大学教員としては、ただただ敬服する外はない。

一九四二年六月のミッドウェイ海戦は、当時華々しい大戦果を上げたものと新聞ラジオで報道されたものであるが、戦後になって日本側の大敗北であることが明らかとなった海戦である。毎日夕方のラジオで軍艦マーチとともに「赫赫たる大戦果」の「大本営発表」が報道されるが、その多くが嘘であった。なかでもミッドウェイ大勝利の大本営発表は最大の嘘である。

日本軍はオーストラリアに逃げ込んだアメリカ軍を追撃して、東部ニューギニアに突入していたが、五月七日～八日の珊瑚海海戦ではじめて空母同士が激突し、双方とも空母を一隻ずつ失い、一隻ずつ大破という痛み分けの結果となった。ここから日本海軍の敗北が始まる。

真珠湾攻撃では海軍航空隊は、戦闘用艦船への攻撃に終始し、修理施設、ドック、給油タンクをほとんど攻撃しなかった。浅い真珠湾で沈没大破した艦船はぞくぞく引き上げられ、修理され復活してくる。

珊瑚海海戦で大破したはずの空母が、ハワイでの三日間の修理で復活してくる、こういうことはすべて日本側の誤算であった。

連合艦隊司令長官山本五十六は、ハワイ西方のミッドウェイ島の航空基地の攻撃を思い立った。ドウリットル空襲への反撃である。

連合艦隊は北方のアリューシャン列島（アッツ島・キスカ島）を攻撃するとともに、機動部隊でミッドウェイ島攻撃に出撃した。

空母六隻（虎の子の大型空母四隻を含む）、戦艦一一隻、航空機一〇〇〇機以上という大軍である。これに対するアメリカ軍は空母二隻（これに珊瑚海海戦で大破したはずの一隻が応急修理で参戦）、戦艦なし、航空機一二〇機という劣勢である。

日本側は敵機をつぎつぎに撃墜し、圧倒していたが、日本側の作戦ミスを衝いて、残余の急降下爆撃機が日本側空母に殺到し、大型空母四隻を撃沈、多数の航空機とパイロットを失った。

大本営発表では敵空母一隻撃沈、一隻大破、二〇〇機以上撃墜と「赫赫たる大戦果」を発表したが、まったくの嘘であった。

ミッドウェイについては、戦後すぐ関係者たちによって書かれた淵田美津雄・奥宮正武『ミッドウェイ』（一九五一年）がある。淵田海軍中佐は第一航空艦隊の総指揮官として空母「赤城」に搭乗しており、奥宮正武は大本営参謀であるが、事実上淵田の単著である。

淵田によると、第一次攻撃隊長友永大尉から第二次攻撃の必要を上申された南雲中将は第二次攻撃隊によるミッドウェイ島空襲を命じ、雷撃機搭載の魚雷を陸用爆弾に変更させた。

その直後に敵空母接近の報があり、魚雷装備へ再変更した。その間隙を縫って殺到した米軍機に攻撃され、大型空母四隻の全艦撃沈という大敗北を喫したことになる。

「運命の五分間」という悲劇の物語である。多くの海戦史は旧海軍関係者の圧力（執筆者宅への怒鳴り込みもある）もあって、「運命の五分間」説に統一されていた。映画「ミッドウェイ」も同じである。

ところが戦史室の『ミッドウェイ海戦』は微妙な表現ながら「運命の五分間」を肯定していない。

沢地氏はこの点を深く掘り下げ、「戦闘詳報」を分析し、関係者への徹底的な取材により、「運命の五分間」を明確に否定した（『毎日新聞』一九八三年一月五日付スクープ）。

もともと第二次攻撃隊の兵装は、陸地攻撃用の爆撃であって、敵空母接近の可能性を過小評価したものであった。「運命の五分間」は作戦ミスを覆い隠す淵田の創作であった。「無敵連合艦隊」とか「連合艦隊の栄光」など、最初からなかったのだ。

ミッドウェイの敗戦は、陸海軍首脳に大きな衝撃を与えた。一年半は大暴れして見せるという連合艦隊司令長官山本五十六の豪語は、半年しか持たなかった。天皇はただ「艦隊の士気に影響なきや」と尋ね、「司令長官に益々奮励するように伝言せよ」といっただけだった。

まもなく八月上旬、ガダルカナル島で米海兵隊の上陸がはじまった。日光に避暑に行っていた天皇は、一瞬愕然として「それは米英の反攻の開始ではないか。いま、日光なぞで避暑の日を送っている時ではない」と、帰京を命じた。まさしくこれは連合軍の反攻の開始であった。

## ポート・モレスビー作戦

一九四二年八月、日本軍は東ニューギニアとガダルカナルで大きな作戦を発動した。

一つは東ニューギニアで発動されたポート・モレスビー作戦である。この作戦ほど、おろかな作戦はなかった。ポート・モレスビーをめざしてブナを出発した五〇〇〇名の部隊は、一六日分の食糧を携行していた。これに銃器を加えると、相当の重さである。

部隊は標高二〇〇〇メートル以上のオーエン・スタンレー山脈を越えねばならなかった。山頂に近づくと、万年雪地帯である。夏の軽装であった将兵は寒さに凍えた。

赤道直下だから、つねに暑いというのは、錯覚である。ニューギニアには三〇〇〇メートルを越す山々があり、万年雪地帯は多い。わたくしはインドネシアのジャカルタで車で約一時間南のブンチャックという保養地に行ったことがある。標高八〇〇ないし九〇〇メートル地帯だが、夜は暖炉を使用していた。南緯六度の熱帯で暖炉とは。わたしはこれでポート・モレスビー作戦の失敗を了解した。

寒さに凍えた将兵たちは、一六日分の携行食糧を食べつくし、三〇日かかって山脈を越えた。ポート・モレスビーは大都市で、現在はパプア・ニューギニア共和国の首都である。そこへ行けば何とかなると考えたのであろう。

先遣隊は町の灯下が見える地点まで達したが、すでにアメリカ軍とオーストラリア軍の大軍がこの都市に駐屯していることが分かった。しかし空腹では戦えない。そこでふたたびブナに戻ることにした。もはや食糧はなく、ヘビ・トカゲを食べながら、ふたたび寒さのスタンレー山脈を越えた。飢えて体力の衰えた将兵をアマーバ赤痢、マラリアなどがおそった。多くの将兵が死に、生き残ったものもほとんど病人であった。かれらは敵と戦いもせず、死んでいった。しかもブナ沿岸にはすでにアメリカ海軍が接近し、猛烈な艦砲射撃を加えていた。日本軍の犠牲は約一万三〇〇〇人に達した。これは明白な「犬死」ではなかったか。

原因は地理および目標地の敵情についての事前調査の完全な不足である。参謀たちの机上作戦であったのだ。

ニューギニアへの日本軍の上陸は、ガダルカナル島より早い一九四二年三月上旬である。ニューギニア島の総面積は日本の二倍以上、人口は現在一六〇万人であるから、当時は七〇万人程度であったろう。

日本軍の総派遣兵員は二〇万人、戦死一五万人、うち陸軍は九万六九四四人派遣して八八二七人しか帰還しなかった。九一パーセントの死亡率は、世界史上最大のものである。

なおオーストラリア軍の戦死者は約八〇〇〇名、アメリカ軍は約四〇〇〇名といわれており、対敵比率でも最悪の数字である。

昭和天皇は「私はニューギニアのスタンレー山脈を突破されてから、勝利の見込みを失った」（『昭和天皇独白録』）と述べている。

## ガダルカナル

もう一つはガダルカナル島である。ソロモン海域に浮かぶソロモン諸島の主島であり、六五〇〇平方キロ、島じゅうが熱帯雨林に覆われていた。日本軍はここに航空基地を建設しようとして、設営隊二六〇〇名（うち二三〇〇名は徴用工員と朝鮮人土工）と警備隊二五〇名を送り込んだ。ただし建設工事といっても当時の日本にはブルトーザもパワーショベルもなく、すべて手作業である。

海軍航空隊の基地は北方のラバウルにあり、ガダルカナル島からは一〇〇〇キロも離れている。零戦は航続距離は二〇〇〇キロ程度という優秀な飛行機ではあったが、ソロモン海南部上空に到着しても一五分か二〇分で戦闘から離脱して帰還しなければならない。そこでどうしてもガダルカナル島附近に飛行場が欲しかったという。

そこへアメリカ海兵隊約二万名が上陸してきた。その輸送船を護衛するため巡洋艦・駆逐艦はもちろん、空母・戦艦まで動員し（総艦船数八二隻）、航空機二九三機が配備されていた。一九四二年八月七日のことである。

設営隊はほとんど武器を持っていなかったから、かれらはすぐジャングルに逃げ込んだ。食糧無しである。

当時ソロモン海域の日米海軍は空母で六隻対四隻、戦艦で一二隻対七隻と日本側が優勢であった。七日夜の第一次ソロモン海戦では日本側が大勝したが、日本側は相手の戦闘艦のみを攻撃したのみであったから、アメリカの輸送船団は無事兵員を揚陸させ、両島を占領した。

そこで盧溝橋事件を起こした一木清直少将の支隊二五〇〇名のうち、九〇〇名の先遣隊が派遣された。

弾丸は各二五〇発、食糧は七日分。アメリカ軍は二〇〇〇名程度という情報を信じ、熱帯雨林に潜入迂回して、八月二十一日未明に敢行された得意の夜間白兵攻撃は、イル川の砂洲を渡ろうとしたところで、迫撃砲・榴弾砲・機関銃の十字砲火の前に短時間で粉碎された。

午後には戦車が出動して背後を踏みにじった。戦車の後部は「肉ひき器」のようだったという。生き残りは約一三〇名。

次に川口少将の率いる支隊（二個聯隊）と二個師団の合計三万名が上陸しようとしたが、次々と輸送船を沈められ、九月に入ってようやく夜間の「ねずみ輸送」で五六〇〇名が上陸した。

食糧は二週間分。またしてもジャングルに潜入迂回して、九月十二日と十三日に飛行場南部の丘から夜間白兵突撃を敢行して、主力三〇〇〇名は半減した。その丘を「血染めの丘」という。

敵をせいぜい五〇〇〇名と見た「下算」（過小評価）、兵力の逐次投入、携行食糧の絶対的不足、無謀な白兵攻撃が敗因とされている。

大本営は辻正信らの参謀を派遣し、十分な弾薬と食糧、航空部隊の協力を要求した川口支隊の参謀長を罷免、仙台第二師団の歩兵一万七五〇〇名、火砲一七六門、弾薬〇・八会戦分、食糧三〇人分を注ぎ込もうとした。

問題は輸送にあった。ニューブリテン島のラバウルは海軍航空隊の基地であり、多数の零戦を擁し、アメリカ軍と対等の交戦をしてきたが、ガダルカナル島までは約一〇〇〇キロあり、いかに航続距離の長い零戦でも上空に一五分ないし二〇分しか止まれなかった。空はしだいにアメリカ軍が支配しはじめる。

十月十四日六隻の輸送船が資材の陸揚げ作業中を襲われ、四隻が炎上、食糧は半分、弾薬は一～二割しか揚陸できなかった。

ふたたび夜間白兵攻撃が企図された。右翼を担当した川口支隊の布告に曰く、「歩兵の銃剣突撃は日本国軍の精華である。

敵が一番怖いのだ」「敵の長所は火力の優勢にある。之を封ずる方途は夜暗と密林の利用にある」「斯くして皇軍の勝利間違いなし」

間違いなかったのは日本軍の惨敗である。しかも「血染めの丘」の正面を避け、さらに迂回することを進言した川口少将は総攻撃直前に罷免された。辻正信参謀の策謀であろう。

十月二四日夜、右翼の東海林支隊（旧川口支隊）の攻撃は予想通り失敗、左翼を担当した第二師団の第二十九連隊主力も失敗、二十五日夜、第十六連隊も再度の突撃が敢行されたが、これも失敗、両連隊長は戦死、約半数の兵士が戦死した。さすがの辻参謀もそれ以上の攻撃をあきらめた。

以後救援を絶たれた残存兵は、食糧を求めて島のジャングルを徘徊し、つぎつぎと餓死し、あるいは栄養失調からくるアメーバ赤痢、マラリアなどに倒れた。ガダルカナルを略した「ガ島」は、「餓島」といわれた。「不思議な生命判断」が生まれたのはこの時である。

辻は大本営にガダルカナルの惨状を報告したが、軍首脳部はなかなか決断できず、十二月末に至って撤収案を天皇に上奏し、裁可を得た。

日本軍の損害は投入兵力三万二〇〇〇名、戦傷死一九〇〇余名、戦病死四二〇〇余名、行方不明二五〇〇名であった。アメリカ軍の損害は投入兵力六万名のうち、戦死一〇〇〇名、負傷者四二四五名、餓死者ゼロであった。

## 餓死の研究

彦坂諦氏の『餓死の研究——ガダルカナルで兵はいかにして死んだか』（一九九二年）は大変な力作である。



彦坂氏は、『人はどのようにして兵士となるのか』上下（一九八四年）、『人はどのようにして殺されるのか』上下（一九八七年）、『人はどのようにして生き延びるのか』上下（一九九五年）の『無能兵士シリーズ』を書いており、別に『餓島 一九八四・一九四二』（一九八七年）、『ガダルカナル一九四二・一〇／一・二七』（一九八七年）も書いている。

何故日本軍はすぐ食糧不足に襲われるのであろうか。最初から十分な食糧を携行しておけばいいのであるが、何故そうしなかったのか。

第一に伝統的に食糧は現地調達という思想があったことである。これは中国戦線ではある程度通用した。

中国は人口が多く、食糧も豊富で、内容も日本兵の口に合っていたから、略奪さえすればよかった。しかし南太平洋の島々では人口が希薄であり、略奪しようにも略奪するものがなかった。

第二に日本軍はそのような南太平洋の食糧事情を十分研究していなかった。そもそも陸軍は対ソ戦の訓練しかしておらず、南太平洋での戦闘は予期していなかった。

そのことは島に上陸する作戦そのものがきわめて拙劣であったことに表れている。上陸用舟艇がなかったのだ。

第三に日本軍の階級制度に問題があった。将校と兵隊とでは、待遇が違うのだ。司令部では食糧は豊富にあり、宴会には大量の肉料理も出されたし、スコッチ・ウイスキーすら用意されていた。

あれほど西洋文明・白人支配を批判し、国内では英語使用すら禁じていたのに、日本軍の将軍たちが西洋料理とスコッチウイスキーを好んでいたのには驚く。この資材の輸送は優先的に行なわれた。

一九四三年一月十五日ガダルカナル撤退命令を第十七軍戦闘司令所に伝えるため、第八方面軍参謀井本熊雄中佐と佐藤中佐は、エスペランス岬に上陸した。

当番兵ら四名は完全武装のほかに約二〇日分の食料とウイスキー、ダース、菓子、魚の干物など各人約六〇キロの荷物を持たされた。ウイスキーや菓子がどこにあったのだろう。

これは亀井宏『ガダルカナル戦記』第三巻の記述である。井本は戦後の記述でジャングル地帯の患者収容所や野戦病院で会ったこの世とは思われぬ情景について書いている（防衛庁戦史室『南太平洋陸軍作戦（2）』）。しかしかれは自分の携行物については書いていない。

ある将校は給仕をさせた当番兵を餓死させている。

自分だけ豪華な食事を食べていたのであるが、当番兵の空腹にいささかも配慮しなかったわけだ。こういう将校を育てたのが、軍のエリート教育であった。

第四に輜重・兵站・補給というものへの絶対的な軽視である。輜重兵が兵隊のなかでも最下級であり、さらに輜重輸卒は兵隊扱いされなかった。「輜重輸卒が兵隊ならば、蝶もとんぼも兵のうち」という歌がこのことをよく示している。

兵員のみではなく、武器弾薬や食糧を運ぶ輸送船に十分な護衛がつけられなかった。ガダルカナルへの輸送は、アメリカ海空軍の攻撃で困難を極めたことは、先述した。

その折り、ようやく兵員輸送を完了した輸送船の船員代表が食事を求めたところ、軍司令部の若い将校が、前線の部隊は飢えと戦っているのに、貴様らにやる食糧はないと怒鳴りつけ、食事を与えられなかったことがある。船員たちは空腹のまま危険海域を護衛不足のまま帰っていったが、これでは輸送の継続は困難である。

## 戦車対大和魂

一九世紀以来ヨーロッパでは歩兵・騎兵・砲兵の三兵を巧みに駆使する三兵戦術が採られてきた。砲兵が猛砲撃を加え敵を分断し、騎兵が突

入して敵を散乱させ、最後に歩兵が残敵を掃蕩するのである。日本もこれに倣ったが、何故か歩兵中心主義であった。日露戦争でも騎兵は重視されず、砲兵は軽視された。

軍のエリートである参謀将校がほとんど歩兵出身であることが主な原因であるが、満洲事変以来近代化の遅れた中国軍と戦ううちに、慢心が生じたのかも知れない。ノモンハン事件ではソ連軍の優秀な空軍と砲兵の攻撃で日本側が身動きできないところに、騎兵に代る大量の大型戦車隊によって散乱させられた。日本の戦車は少数で鉄板が薄く、簡単に頓挫した。一方対戦車砲が開発されていなかったから、日本兵は火炎ビンで対抗するほかはなかった。

ノモンハン事件は、関東軍がソ連軍を旧ロシア軍と同じ程度に見ていたことによる。日露戦争でもロシア軍は大量の機関銃を持ち、日本軍は人海戦術で大損害を出しながら、要所々々での砲撃戦でかろうじて勝利しえたのだが、その教訓は生かされなかった。

ソ連は一九一七年の革命以後、内乱がつづき、一九一八～二二年のシベリア出兵で日本軍が戦ったのは、小銃のみのパルチザン部隊であった。しかしその後近代化を進め、強力な砲兵部隊と戦車部隊を持つに至った。関東軍は、この点を完全に見逃していた。相手も常に進歩するのである。

日本軍で常に強調されるのは、精神力であり、指揮官の「決心」が重要視された。しかし猛砲撃と戦車部隊に対してどのような精神力で対抗できたのだろうか。

関東軍は終始一貫東京の大本営、参謀本部の指示を無視した。また関東軍のなかでも作戦は作戦班長服部卓四郎と辻政信が掌握し、上部の指示を待つことなく、独断専行した。

陸軍では中堅将校の下剋上が常態であった。上部の者で押さえるものがないのである。

しかもこれは局地戦のように見えるが、独ソ不可侵条約締結とポーランド分割というヨーロッパの情勢と結びついており、ソ連軍が後方の安全を図るため大軍をノモンハンに送ったのであった。関東軍はこうした国際情勢をまったく知らなかった。敵も知らず、己も知らず、である。

ノモンハン事件の敗北は秘密にされ、生き残りの兵は南方に転属されたと言う。戦後しばらくしてようやく真相が明るみに出て、研究が進んだ。

明らかに日本軍は柔軟性と弾力性に欠けていた。『歩兵操典』の墨守がその典型である。ノモンハンでは砲兵と戦車の劣勢のため夜間の白兵戦を試みたが、ほとんど成功していない。太平洋戦争でもつねに同じ戦法を繰り返し、敗退した。ガダルカナル然り、インパール然り。

これは実戦に参加した部隊長を自決させ、生き残りの兵の口を塞ぎ、無能な責任者を再度起用したことの結果であった。

## 日本軍の神話

多くの戦史は、日本軍は政・戦略では誤りがあったが、戦術的には各戦線で敢闘した、日本軍の勇敢さと頑強さは、米軍も認めていると自画自賛している。また物量作戦に破れたともいう。

また技術は優れていたのだが、タッチの差で間に合わなかったともいう。これらは本当だろうか。

アジア太平洋戦争に投入された日本陸軍の総兵力は一六九個師団五五五万人（うち太平洋方面は四七個師団）、これに対してアメリカ軍地上部隊（陸軍と海兵隊）は二七個師団二一〇万人である。

戦死者は日本軍一八九万（太平洋方面九六万人）、アメリカ軍九万人、戦傷者日本軍七万人、アメリカ軍二三万人である。太平洋戦線への投入兵力は日本軍は二倍近いのに、戦死者は一〇倍以上の差である。惨憺たる敗北である。これでどうして強かったといえるのだろうか。

物量作戦に破れたというが、一九四一年から四五年までの日本の軍事費は一五〇億ドル、アメリカの軍事費は九五〇億ドルだが太平洋戦線へは約三〇〇億ドルであり、約二倍程度の差である。

投入した航空機は日本軍は五万八〇〇〇機、アメリカ軍はヨーロッパ戦線を含んで一二万九〇〇〇機で、アメリカ側が二倍以上だが、喪失機は日本軍四万三〇〇〇機、アメリカ軍は同じくヨーロッパ戦線を含めて二万二〇〇〇機で、日本側が約二倍の損失である。

また地上部隊の師団規模の戦力は、大きな差があったとは思えない。師団は日本が一万五五〇〇人に対して、アメリカ海兵隊は一万九三〇〇人、これに対して小銃は日本側が一七〇〇挺、アメリカ軍は一〇九〇〇挺、機関銃や大砲も互角で、戦車がゼロに対して五四台というのが眼につく程度である。

海軍を比較してみよう。

喪失艦は次表で見るように日本軍が約二～三倍の損失であり、物量の差というほどではない。

---

	戦艦	航空母艦	巡洋艦	駆逐艦	潜水艦
日本軍	7	19	36	121	127
アメリカ軍	6	10	10	57	50

---

むしろ戦略から個々の戦術に至る総合力の差が決定的であったように思える。

日本の軍事技術が優秀であったという神話もある。

一九五三年に奥宮太平・堀越二郎『零戦』が刊行された。堀越二郎は東京帝大から三菱に進んだ超エリートであるが、三菱が開発中であった

M K 9 A エンジンを海軍が採用し、十七試艦戦烈風が実用化されていたら、アメリカ軍の F 6 F に勝てたと主張する。この種の話は今なお戦記物やコミックスに再生産されている。

問題は超エリートの知らない日本の工業力のレベルであった。エンジンの製作には熟練したヤスリ工による研磨ないし琢磨という仕上げを必要としている。かれらの指の触感は一〇〇〇分の一ミリの精度もこなせたが、これは大量生産には向かなかった。

戦争の拡大とともに、高性能の飛行機生産が必要とされたが、同じシリンダー容積で、二倍の馬力のエンジンを作れといっても、ピストンの速度を高め、高圧高温に耐えられるエンジンは無理であった。

精密工作機械の技術がなかったのである。M K 9 A エンジンはたしかに一基完成していた。それは熟練工の長期間にわたる苦心の作品である。しかし大量生産はまったく不可能であった。

中島飛行機が製作した誉というエンジンがある。これは一九四一年に完成し、疾風や紫電改に使用されたが、開放検査を省略して大量生産したため、実施部隊では故障が多すぎて使い物にならなかった。

もし堀越のいうように M K 9 A エンジンを採用し、烈風を量産しようとしても、できなかつたであろう。

奥村正二『戦場パプアニューギニア』（一九九三年）によると、日本の高度な工場の多くは建設から個々の工程に至るまでアメリカ人技師の指導によつたものであった。

しかも戦争が拡大すると小学校卒ながら精密技術をもつた熟練工は戦地に送られ、そのあとに国家総動員法の国民徴用令により、さまざまな職業をもつ素人集団が大量に工場に配属された。

かれらは製品の質には無関心で、能率は悪く、彼らを受け入れた宿泊施設は劣悪であった。賭博、盗難、南京虫が横行し、配属憲兵の威嚇によってからくも生産がつづけられた。

国産機械の磨耗もひどかった。もっともひどかったのが歯切機械で、精密な歯車の大量生産は、国産品では出来なかった。切削工具（ドリル）も国産品は、アメリカ製より品質が劣り、つぎつぎに破損した。アメリカからの輸入品の残りは貴重であった。

油も不足していたが、とくに良質の潤滑油がないと、機械がすぐ故障する。アメリカからの輸入品が底をつくると、故障は頻繁になった。

南洋の石油は潤滑油に適せず、しかも前記素人集団が、いろいろな油を使ったから、給油系統の故障は慢性化した。

しかも工場の監督官たちは、配属将校や憲兵も含めて、機械とか技術には無知で、やたらと精神主義であった。大和魂で機械が動けば問題はなかったのだが。

大学工学部や高等工業学校の出身者が、工場実習もしたことがなく、快適な会社の設計室で、つぎつぎに高度な発明をしても、日本の工業力は輸入機械と、熟練工の神わざのような技術に頼っていたのである。

この点アメリカが、単能の工作機械を用い、未熟練の女性労働者を動員して航空エンジン部品を大量生産していたのと大違いである。物量ではなく、物の質、ひいては人の質の違いであった。

## 輜重輸卒が兵隊ならば

古来、戦争には軍隊を動かす道、武器と兵糧の調達と輸送が不可欠であった。ローマ帝国が縦横に張りめぐらした道路網をたくみに運用し、武田信玄が多くの工兵部隊を用い、道路と橋を建設し、騎馬軍団の迅速な突進を可能にしたことが想起される。

また軍隊は武器はもちろんのこと、衣類、医薬品、燃料が必要であり、負傷者の後方への輸送と治療、人員の補給も必要である。

さらに戦争は豊富な食料があってこそ戦えるのであり、これを逆用した兵糧攻めは効果的であった。これらを総じて兵站という。

戦争には兵站ルート of 確立が不可欠である。兵站ルートは軍隊のいわば生命線である。

日本陸軍においては、兵站軍管区が置かれ、兵站主地と兵站末地のルートが設けられた筈であった（兵站のことを自衛隊では後方という）。筈であったというのは、あまりにもそれが貧弱であったからである。

兵站は輜重兵がこれを担当したが、戦闘部隊にくらべて軽視されていたことは否定できない。陸軍大学校には輜重科があったが、全卒業生の一パーセントにすぎず、中堅将校養成の輜重学校は一九四〇年にやっと設立された。

次の図をみてほしい。これは満州事変以後の陸軍の戦闘単位である師団の平時および戦時編成を示したものである。

戦時編成二五三七五名のうち、歩兵は二個旅団（四個聯隊）で一五一三八名（五九・七パーセント）、砲兵は一個聯隊で二八九五名（一一・四パーセント）、騎兵も一個聯隊で四五二名（一・八パーセント）である。

これに対し輜重兵は一個聯隊で三四六一名（一三・六パーセント）、これで軍隊の兵站を担うことができたであろうか。また工兵も一個聯隊で六七二名（二・六パーセント）であるが、これで道路や橋、場合によっては兵舎、飛行場の建設が可能であったらうか。

輜重兵の下に輜重輸卒がいた。これは実際に食料と武器の運搬をする兵卒で、一九三一年以降輜重特務兵とされた。

水上勉氏と野間宏氏の回想では、徴兵検査で甲種合格の体格のいい輜重兵のもとで、第二乙種または丙種の弱々しい輜重輸卒が重い荷物を背負ったり、車をひいていたそうである。

俗に「輜重輸卒が兵隊ならば、蝶もとんぼも鳥のうち」と歌われたが、輜重輸卒こそ軍隊の生命線を担っているという認識はなかったようだ。



## 四〇キロの重量、四〇キロの速度

一九四五年七月の陸軍の師団は一七八個師団であったが、うち歩兵師団は一七〇個師団、戦車師団四個師団、高射砲師団四個師団で、歩兵の比率は九五・五パーセントであった。以上に高い比率である。

参考……三野正洋『日本軍の小失敗の研究』（一九九五年）

同『続日本軍の小失敗の研究』（一九九六年）

歩兵は四〇～六〇キロの重量の装備をもち、一時間五キロのペースで歩かねばならなかった。

三八歩兵銃が三・九キロ、銃剣一挺・銃弾一二〇発・手榴弾二発・擲弾筒砲弾五発など一〇キロ、鉄帽・小型シャベル・ガスマスクなど一〇キロ、食料として米七日分・乾パン・缶詰・味噌醤油合わせて八キロ、衣類予備・水筒・飯盒・携帯テントなど八キロ、以上約四〇キロである。これに冬季には毛布二枚、厚手のコート、携行燃料などが加わる。

二等兵はさらに六〇発の銃弾予備、五発の擲弾筒砲弾予備をもたねばならない。これらを合計すると六〇キロ近くになる。

『歩兵操典』では一步の歩幅は七五センチ、一分間一一四歩と定められていたから、一分間に八六メートル、一時間に五・一キロ歩かねばならない。

歩兵部隊の進撃距離は一日二〇～四〇キロであったから、時速五キロとして四～八時間を歩かねばならない。

重量四〇キロを担いで、八時間の連続進撃は可能だろうか。当時の平均身長一六〇センチ、体重五五キロの二〇歳台前半の日本人男性の体力である。

これだけの重量をもってかなりのスピードで戦場に到着しても、兵士に戦闘能力は残っていただろうか。おそらくは疲労困憊し、相当の休息を与えなければならなかったであろう。

しかし日本軍には定期的な休息という考え方がなかった。アメリカ軍は日の出から日没まで攻撃し、夜は休息する。この合理主義を日本側は軽蔑し、サラリーマンのような勤務状態と嘲笑する。

しかしこの休息をはさんだやり方が、兵士の体力と気力を回復させ、戦闘においてもっとも効果的な方法であった。休息も予告されず、一方的に緊張のみ強いられる日本軍の兵士の体力の衰えの方が甚だしかったのである。

しかも残酷な階級制度によって、下級兵士・新兵を酷使し、私刑を加える秩序がある。日本兵の残虐さは、この階級制度と無縁ではあるまい。しかしそれにしても何故陸軍は兵員の輸送に車を使用しなかったのだろうか。かりに兵員は歩いても、荷物は車を使えなかったのか。

また部隊は重機関銃や擲弾砲（迫撃砲）を分解して運んだが、これらは台車をつけることができなかつたのであろうか。

中国戦線の写真を見ると、日本軍は大砲を大八車や馬車で運んでいるが、なぜトラックを利用できなかったのか。

これは自動車工業の発達程度ともからんでいる。もし大量のトラックがあれば、兵員と物資を迅速に輸送でき、大八車や馬車は不要だった。しかし日本の自動車工業はまだ揺籃期にあった。

庶民車が普及し、兵士のほとんどが運転免許を持っているアメリカ軍と、免許所有が皆無に等しい日本陸軍との差はあまりにも大きすぎた。

## バンザイ突撃

『歩兵操典』は歩兵の戦闘要領を規定したものであるが、歩兵は他兵種と協同を欠いても戦闘を遂行すること、歩兵の本領は突撃であるこ

と、最終的には銃剣突撃とすること、敵の行動・情報・我が方の兵站（補給）にかかわらず、自主積極的に行動することなどが規定されている。銃剣突撃による交戦を白兵戦という。ガダルカナル、サイパン、ニューギニアなど南の島々で、日本軍はアメリカ軍の機関銃の十字砲火のなかを、喚声をあげて日本兵は突撃し、ほとんど薙ぎ倒されるように戦死した。これをバンザイ突撃（BANZAI Charge）という。

損害はアメリカ兵の八～九倍にのぼり、惨敗を喫した。戦史のなかにはアメリカ軍に恐怖を与えたと自賛しているのもあるが、その根拠は示されていない。

『歩兵操典』が敵軍の情報に注意せず、補給を考えず、自分たちで思うままに攻撃せよといているのは、まったく論外であった。

戦死者の半数は砲弾あるいは爆撃、一部は地雷によるものであるが、残りの半数は機関銃や小銃の銃弾を顔面・頭部あるいは上半身・下腹部に受けたことによる。

鉄砲が伝来した戦国時代にも足軽たちの鎧は軽装化したものの、防備用の盾と頭部の笠、上半身を覆う鎧は強化されていた。当然のことながら銃傷の多い近代戦では、防弾チョッキ（フラクジャケット）が考案された。

しかし日本軍およびドイツ軍には頭部の鉄兜はあるものの、防弾チョッキは工夫されていない。金属板を上着にはめ込めばいいのだが、日本陸軍は防御への配慮を臆病と見たのか、まったく考慮しなかったようだ。

工兵部隊も悲惨であった。工兵はほとんど無防備で危険な建設作業をしなければならぬ。

道路、橋、宿舎、飛行場を建設しなければならなかった。しかもアメリカ軍が実用化しているパワーシャベルもブルドーザーもなく、すべて手仕事なのである。

先に述べたガダルカナルの戦いで、当初日本軍は、ここに飛行場を建設しようとして、二〇〇〇人の工兵部隊を送り込んだ。

護衛は二五〇人の海軍陸戦隊である。tpころがアメリカの大軍が上陸してくると、工兵と労働者はあっという間に密林に逃げ込んだ。この時からガダルカナルの戦いが始まるが、工兵と労働者たちの運命は十分明らかではない。

## 伸び切った兵站ルート

戦闘の一時的勝利におごり、突進しすぎた敵軍の兵站ルートが伸び切ったところを叩くのは、戦国時代からの勝利の方程式である。そのため敵を誘い出すかのように、わざと後退することもある。

日中戦争において中国側は大軍を温存し、戦略的に後退した。日本軍は逃げる中国軍を追って大陸の奥深く侵入し、兵站ルートは細いひものように伸び切った。そのため各部隊は食料を現地調達せざるをえず、略奪が日常化した。そもそも陸軍は食料に関しては現地調達に依存していたから、略奪は当初の方針でもあった。

しかし中国戦線では豊かな農村地帯から食料を調達できたが、人口に希薄な南太平洋の島々では、略奪しようにも集落そのものが少なすぎた。飢えは上陸直後から始まった。

## ヤマザキ、天皇を撃て

パプア・ニューギニアの北海岸一体に展開していた日本軍は、逆襲に転じたアメリカ軍になすすべもなく後退せざるを得なかった。アメリカ海軍の艦砲射撃をさけて、日本軍は海岸から一〇キロ以上奥地のジャングルを逃走した。

北海岸にウエワークという町がある。ここで飛行場を建設することを命じられた工兵大隊五〇〇名は、アメリカ海軍の接近で工事を中止してジャングルに逃げ込んだ。すでにジャングルには何万という日本軍が逃

げ込んでいる。かれらは西をめざしたが、アメリカ軍は先回りして砲撃してくる。

食糧はなく、お決まりの飢えと病気である。原住民の部落は少なく、略奪しようにも食糧はない。わずかな食糧をめぐって部隊同士の戦闘もあったらしい。奥崎上等兵は、山崎上等兵たち数名と助け合いながら、西海岸をめざした。なんとか日本に帰ろうというのが、兵士たちの悲願であった。

しかし飢えと病魔に侵されて、次々と仲間は倒れた。山崎上等兵は足手まといになるからと、ジャングルに姿を消した。奥崎上等兵はアメリカ軍の捕虜となったが、五〇〇名の工兵の生き残りはわずか三名である。

東部ニューギニア作戦では一五万名の日本兵が死んだ。生還した者は約一万名である。アメリカ兵・オーストラリア兵も一万二〇〇〇名戦死した。パプア・ニューギニア人の死者は知られていない。

奥崎上等兵は、戦後の生活で電機商として苦闘した。やっと生活に目途がついたころ、悪徳不動産屋にひっかかった。

口論の末、取っ組み合いとなり、相手を殺害して懲役刑に処せられた。奥崎は獄中で自分の人生を考えた。戦争がかれの運命を変えたことははっきりしていた。

出獄後の一九六六年末、皇居の新宮殿（長和殿）が完成し、新年参賀で天皇一家がバルコニーから手を振るという記事を見て奥崎は逆上した。パチンコ屋で数個のパチンコ玉を入手した奥崎は、手製のパチンコをもって元旦に上京した。その夜ホテルでわずかな食糧を争った別部隊の下士官と会い、お互いに陳謝し、一晚語り明かした。

一九六七年一月二日奥崎は新年参賀の人波にまぎれて二重橋を渡った。バルコニーに天皇一家が立って、手を振りはじめたとき、奥崎はパチンコを取り出して数個のパチンコを打った。

玉はむなしくバルコニーの下の壁にしか到達しなかった。奥崎は近づいてきた皇宮警察官に逮捕された。

新聞は奥崎はパラノイア（偏執狂）と報じたが、ただ一つ毎日新聞だけが、「山崎、天皇を撃て」と何人かの人名を叫びながらパチンコを発射したと報じていた。

奥崎は暴行罪で起訴された。被告人の弁護人は、被害者とされる天皇の出廷を求め、被告があなたの命令でニューギニア作戦に従事したことについてどう思うか、と尋ねようとしたが、認められず、懲役一〇年となった。

参考・奥崎謙三『ヤマザキ天皇を撃て』（三一書房 一九七二、新泉社 一九八七）

しかしニューギニアの悲劇は、インパール作戦でもレイテ作戦でも繰り返された。

一九四四年に始まるインパール作戦は、盧溝橋事件を日中全面戦争に持ち込んだ牟田口廉也が第十四軍司令官として、総指揮をとった無謀な作戦であった。

第十四軍の三個師団は、食糧・武器弾薬の十分な準備のないまま、雨期の山岳密林地帯を、ミャンマーからインドへ向かって突破しようとし、失敗した。

牟田口は命令は無茶だと進言する師団長を次々に罷免し、犠牲を大きくした。

敗走した日本兵の死体は、道路周辺に散乱し、白骨街道といわれた。牟田口は逃亡し、戦後も生きながらえ、自己の弁護をつづけた。

蛙飛び作戦でフィリピンに迫ってきたアメリカ軍は、一九四四年七～八月にマリアナ諸島を占領した。サイパン島の日本軍二万人と民間人一万人が玉砕した。

日本軍は捷号作戦を発動し、フィリピンのルソン島を中心に防衛しようとした。十月には台湾に迫ったアメリカ軍と激しい航空戦が行われたが、これに勝利したと誤認した日本側の戦術が狂いはじめた。

十月下旬レイテ島では、最後の決戦を求める連合艦隊とアメリカ軍が激突した。日本軍は惨敗し、レイテ突入に失敗し、連合艦隊は壊滅した。この時重慶爆撃の司令官大西瀧治郎が神風特別攻撃隊を出撃させている。

ちりぢりになった陸軍部隊は援護も補給もないままレイテ島を放浪した。お決まりの飢えと病気がかれらを襲い、極限状況に追い込んだ。敗兵の一人であった大岡昇平の『レイテ戦記』は、どの歴史家よりもすぐれた分析をしている

兵士のなかには「生きて虜囚を辱めを受けることなかれ」と戦陣訓を守り、捕虜になると自殺したものも少なくない。

また少数ながら最後まで戦ったものもいる。二八年グアム島のジャングルに潜んだ横井庄一、ミンドロ島の台湾高砂族の李光輝（中村輝夫）、三〇年間ルパン島に潜んだ小野田寛治らである。

しかし戦陣訓をたてに将兵に自殺を命じた司令官や参謀たちは、真っ先に逃げ出し、戦後も生きながらえて多額の軍人恩給を受領し、天寿を全うしたものも少なくない。

まことに太平洋各地で散った数十万の将兵の死は、犬死にというほかはないのではないか。

(1) 彦坂諦『餓死の研究——ガダルカナルで兵はいかにして死んだか』（立風書房 一九九二）

(2) 彦坂諦『ある無能兵士の軌跡』シリーズ、『人はどのようにして兵士となるのか』上下（罌粟書房 一九八四年、柘植書房 一九九六年）、『人はどのようにして殺されるのか』上下（罌粟書房 一九八七年、柘植書房 一九九六年）、『人はどのようにし

て生きのびるのか』上下（柘植書房 一九九五年）、『餓島 一九八四・一九四二』（罌粟書房 一九八七年）、『ガダルカナル 一九四二,一〇/一一二七』（罌粟書房 一九八七年）、『ある無能兵士の軌跡・総年表』（柘植書房 一九九六年）、

- (3) 戸部良一ほか『失敗の本質——日本軍の組織的研究』（ダイヤモンド社 一九八四年、中公文庫 一九九一年）
- (4) 藤原彰「「犬死」の歴史的背景」（『週刊金曜日』五号 一九九三年十二月三日付）、この号の特集は「あれは「犬死」だった」
- (5) 藤原彰「第二次大戦における日本軍の餓死について」（『女子栄養大学紀要』二二号 一九九一年十二月）
- (6) 奥村正二『戦場パプアニューギニア』（中公文庫 一九九三年）
- (7) 奥崎謙三『ヤマザキ天皇を撃て』（三一書房 一九七二年、新泉社 一九八七年）
- (8) 大岡昇平『レイテ戦記』上中下（中公文庫 一九七四年）
- (9) 三野正洋『日本軍の小失敗の研究』（光人社 一九九五年）、同『続日本軍の小失敗の研究』（光人社 一九九六年）
- (10) NHK取材班編『ドキュメント太平洋戦争』全六冊（角川書店 一九九三年～一九九四年、文庫版もある）1 大日本帝国のアキレス腱（シーレーン）、2 敵を知らず己を知らず（ガダルカナル）、3 エレクトロニクスが戦いを制す、4 責任なき戦場（インパール）、5 踏みにじられた南の島（レイテ・フィリピン）、6 一億玉砕の道、VTR版（文芸春秋 一九九四年）



# 歴史と現代 23

## 不思議な生命判断

立つことのできる人間は……寿命は三〇日間

身体を起して坐れる人間は………三週間

寝たきり起きれない人間は………一週間

寝たまま小便をするものは………三日間

ものを言わなくなったものは………二日間

またたきしなくなったものは………明日

これはガダルカナル島のアウステン山を守備していた将兵の間に流行していた「不思議な生命判断」である。

（第三十八師団歩兵一二四連隊旗手小尾靖夫少尉の日記、防衛庁戦史室編『戦史叢書 南太平洋陸軍作戦（1）』）

小尾少尉は「この非科学的であり非人道的な生命判断は決して外れなかった」と書いている。

こういう兵士の瀕死の状態が、一九四二年夏から南太平洋一帯で広がっていたのである。戦争はまだ始まったばかりというのに。